

## 医学と政策科学と統計学

宮川 公男\*

私が現在最も力を注いでいる研究領域は政策科学であり、また過去に専門としてきた一つは統計学であるが、いずれも医学と密接な関係がある。

18世紀後半からの産業革命に端を発し、特に19世紀に入り、農業社会から工業社会への移行と、それともなう都市化の急速な進展により、都市に貧困階層が集中的に出現し、さまざまな社会問題が発生した。その一つが公衆衛生問題である。十分な公衆衛生水準を確保することは、支配階級である上流階級や中流階級にとっても、都市スラムから発生するような伝染病から自らを守るためにも不可欠であり、そのために保健衛生、上下水施設、公共住宅などの公共事業にどれだけの投資をしなければならないかといった公共政策の問題が重要になった。そしてそのような政策策定のために、貧困階層についてその規模や生活実態などに関する統計的データや分析が求められた。このように、公衆衛生や疫学の問題は近代社会における最も古い公共政策的問題として政策科学の誕生に関わっており、そしてそこには社会現象についての統計的データの整備や実証的統計分析の発展への原動力が働いていたのである。

明治維新によって本格的に欧米先進諸国の追尾を開始したわが国においても、幕末・明治維新期の先覚者たちは、政策科学の基本である政策志向を持ち、かつ一様に統計学に大きな関心を寄せていた（詳しくは宮川著『政策科学の基礎』あるいは『政策科学入門』を参照）。また、鎖国時代にただ一つの窓口であった長崎の出島を通して輸入されたヨーロッパの学問の筆頭は医学であり、したがって、村田蔵六（大村益次郎）、長與専齋（長崎精得館（のちの長崎医学校）頭取、初代内務省衛生局長）、福沢諭吉などを生んだ緒方洪庵の適々斎塾（適塾）にその典型を見るように、医学者の開いた私塾から時代のリーダーとなった多くの人材を輩出している。わが国における統計学の始祖ともいえる杉亨二もその一人である。

杉は、漢方医でかつ近隣の青少年に読み書きそろばんを教えていた祖父敬輔の強い影響を受けて医者を目指したものと考えられる。彼は少年時代に奉公した長崎の上野舶来店でオランダ医学を学ぶきっかけをつかみ、大村藩医 村田徹斎の書生を経て洪庵の適塾に入塾している。そして後に幕府開成所教授になった。杉はそこで統計学に接し、医学から統計学へと専門を変えるのである。

ところで、ドイツ語のStatistikや英語のstatisticsが統計とか統計学という日本語に定着するまでにはいろいろないきさつがあった。なかでも興味深いのは、統計という用語に反対した杉を支持したその弟子今井武夫と、統計の語を支持した医学士森林太郎（後に医学博士・文学博士、森鷗外）との論争である。はじめ政表、表記、形勢学、国状学、経国学などさまざまな用語がスタチスチックの訳語として用いられていたが、そのどれをも適切と考えなかった杉は、スタチスチックでは「其仮名の長きに過ぐるを以て」合成文字として「抄掣契」を考案している。彼はスタチスチックという新しい学問が拙速な訳語によって誤

\* 財団法人統計研究会 理事長、本誌編集委員長

---

解されることを恐れたのである。今井・森の論争は、エステルレン著 呉秀三訳『医学統計論総論』の序文として寄せられた森林太郎の「医学統計論題言」にその端を発しているもので、森の論稿を読むと、医学者森の統計学に関する見識は非常にすぐれたものであったことが分かり、きわめて興味深い内容のものである（この論争について興味ある読者は、日本統計協会編『明治・大正期スタチスチック雑誌・統計学雑誌論文選集』および同協会刊『抄智叟——歴史及理論之部』復刻版別冊の細谷新治氏による解題を参照せよ）。

この論争（明治22年）の結果ということではないが、杉は「統計の称 既に深く世人の耳目に感染し改良の功期し難きを覚ふ」として統計という用語を受け入れ、自らの主宰するスタチスチック社を統計学社と改称することを決定している（明治21年）。

以上のような歴史をふり返ってみると、医学と政策科学と統計学とは古くから相互に密接な関連を持って今日に至っていることがよくわかる。本誌は、発行機関である医療経済研究機構の持つ政策志向を受けて、政策研究論文を奨励しており、また医療経済に関わる実証的統計分析をも重視している。医療経済における政策分析も統計分析も昔日とは比較にならないほど高度化している今日ではあるが、先覚者たちの偉大な心意気と足跡とに学ぶことも忘れてはならない。

---